



緊迫化する台湾本島周辺情勢【1】—中国軍および米軍の活動実態—

門間 理良 地域研究部長

NIDS コメンタリー

第 119 号 2020 年 6 月 4 日

はじめに

2020 年に入ってから台湾本島周辺海空域における中国軍の訓練が活発化し、それに呼応するかのよう、同海空域における米軍の活動も増加していることがメディアでも注目を集めている。

もともと中国軍の台湾本島周辺海空域における訓練は 2016 年頃から活発化する傾向にあった。台湾国防部が 2017 年 12 月に刊行した国防白書によれば、2016 年 8 月 18 日から 2017 年 12 月 11 日にかけて、台湾周辺における中国軍の訓練事例として取り上げた中国軍用機の活動は計 23 日間、海軍艦艇の活動は計 4 日間あった¹。その内訳を見ると、中国軍用機が沖縄島・宮古島間を往復して西太平洋で訓練を行ったのが 7 日間だったのに対して、バシー海峡を通過あるいは往復した事例は計 16 日間あった。海軍では、空母「遼寧」が沖縄・宮古島間を航行し、バシー海峡を抜けて南シナ海に航行した事例が 1 度、台湾海峡を通過した事例が 3 度である²。

この時期に中国軍が台湾本島周辺海空域における訓練を活発化させた背景には、2016 年に台湾で総統選挙が実施（1 月）され、民進党の蔡英文政権が成立（5 月）したことが挙げられる。中台関係の現状維持を強く主張するとともに、「1 つの中国」や「92 年コンセンサス」を認めない民進党の政権獲得は、中台統一を目指す習近平政権にとって望ましくない。そこで、習近平政権は蔡英文政権の発足が避けられないものになってからは、軍事的な圧力で台湾独立の動きを封じようとしたと考えられる。

また、習近平中央軍事委員会主席が中国軍を

「戦って勝てる軍隊に」する目標を掲げていることや、2016 年 2 月に七大軍区を五大戦区に再編したことを受けて、より実戦的な訓練を志向するようになったこと、中国海軍、空軍に対する戦略的要請がそれぞれ「近海防御・遠海護衛」、「空天一体・攻防兼備」となり、以前より活動領域を広げていることも、中国軍の訓練活発化の要因に挙げることができる³。

本稿では、公開資料に基づき、中国軍や米軍の訓練や活動がどの程度活発化しているのか、その実態を明らかにすることを目的に執筆している。さらに次稿においては、本稿で得られた知見を基にしつつ、それらの訓練や活動の狙いを分析する。特に、最近メディアで急速に浮上している中国軍が東沙島、バシー海峡を狙っているとの主張に注目して、その可能性を分析することを試みる。

1. 中国軍の訓練活発化の実態

2018 年 4 月に中国軍用機の台湾本島周辺における集中的な飛行が見られた。4 月 18 日から 20 日にかけて、3 日間連続で中国軍機が台湾本島を周回飛行し⁴、さらに 4 月 26 日に、H-6K 爆撃機を含む空軍機多数が台湾本島を周回飛行した。これらの周回飛行はすべて東シナ海から宮古海峡を抜けて西太平洋に出た後、バシー海峡を経由して中国大陸の基地に戻るという飛行経路をとっている⁵。中国空軍が公表した写真を見ると、H-6K 爆撃機と戦闘機の主翼下のハードポイントにミサイル状のものが装備されていることもわかる⁶。これらは実戦を意識した訓練と位置づけられているのであろう。

4 月は中国海軍の訓練活動も活発であった。4 月 19 日夜に「遼寧」1 隻、旅洋Ⅲ級ミサイル駆逐艦 1 隻、旅洋Ⅱ級ミサイル駆逐艦 3 隻及び江凱Ⅱ級フリゲート 2 隻の計 7 隻がバシー海峡を抜けて西太平洋に達し⁷、20 日に与那国島南約 350 km の海域を東進した⁸。さらに 21 日午前 7 時頃、太平洋から東シナ海に向けて北西進する当該艦隊が確認されている⁹。

中国海軍、空軍による一連の活発な活動について、国立政治大学の丁樹範名誉教授は米中貿易協議の難航や米国側のファーウェイ（華為）のスパイ行為懸念の提起により、中国が訓練に借りて米国に示威行動を行ったとの見方を提起している¹⁰。

続く 2019 年で特筆すべきは、3 月 31 日に 2 機の中国空軍の J-11 戦闘機が台湾海峡中間線を越えて飛行したことである。これに対して台湾空軍は IDF を監視のために急行させたほか、F-16 戦闘機を緊急発進させた。中国軍戦闘機の海峡中間線を越えた飛行時間も 10 分を超えたことから、台湾側の反応を探る意図的な挑発行動と考えられている¹¹。

中国の台湾に対する強硬な姿勢は軍事指導者の発言からもわかる。6 月 2 日、シャングリラ会合に中国国防部長として 8 年ぶりに参加した魏鳳和国防部長は、「他国が台湾の分離を図るのであれば、全ての犠牲を払って戦うという選択肢しかない」と述べ、台湾支援の姿勢を強める米国を牽制したことが報じられた¹²。中国指導部は世界が注目するシャングリラ会合を、中国の決意を内外に示す好機と捉えたのだろう。

また、7 月末から 8 月初めにかけて、中国政府は台湾本島北側の東シナ海（浙江省東部沖合）と、台湾海峡の南の出入り口付近にあたる福建省東山島（金門島から南西約 55 キロメートルに位置）周辺海域において、それぞれ 5 日間船舶航行を禁じる通知を発した。2 つの航行禁止海域がいずれも広範囲で、8 月 1 日が中国の建軍節であることから節目の演習になる可能性があるとして北京外交筋は指摘した¹³。本記事を掲載した日本紙は演習が米国への対抗措置であるとの見方を示したが、通知が台湾への自

由旅行停止措置とほぼセットで発表されていることや、演習海域が南北から台湾海峡と台湾本島をおさえる位置でもあることから、中国の台湾に対する「文攻武嚇」の要素も十分にある演習となった。また、台湾総統選挙戦が本格化する時期であり、中国が台湾への圧力を高めたことと民進党政権は判断した¹⁴。

中国海軍、空軍による台湾周辺海空域における活動の活発化の傾向は、2020 年に入ると一段と顕著になっている。2 月 9 日、中国空軍の H-6 爆撃機、J-11 戦闘機、KJ-500 警戒管制機などがバシー海峡、西太平洋、沖縄島・宮古島間を飛行した¹⁵。中国軍東部戦区の報道官は、空軍機のほかにも艦艇も出動させて統合作戦能力を検証したと述べている¹⁶。続く 2 月 10 日には、H-6 爆撃機が短時間、台湾海峡中間線を越えて飛行した¹⁷。この時飛行した爆撃機は前日に防衛省統合幕僚監部が発表した H-6 爆撃機と同一であることが機体番号から確認できる。両日ともに翼下に CJ-10 と見られるミサイルを懸架していた（模擬弾か実物かは不明）。これは頼清徳次期台湾副総統の訪米（2 月 2～9 日）に対する強硬な反応と見られている。

3 月 18 日にはソマリア沖・アデン湾での海賊対処活動を終えた艦隊に 1 隻が加わって、台湾東部海域（西太平洋）を航行した。海賊対処から帰港途中の艦隊に江凱Ⅱ級ミサイルフリゲート「安陽」を差し向けて 4 隻で艦隊を編制していること、また、3 月 18 日に東シナ海に入り¹⁸、青島帰港が同月 25 日午後だったことから、これらの海域で比較的念入りの訓練を行ったと考えられる¹⁹。

4 月には空母「遼寧」を中心とする艦隊が南シナ海・太平洋で訓練を行っている。艦隊の構成を見ると、空母 1 隻、旅洋Ⅲ級ミサイル駆逐艦 2 隻、江凱Ⅱ級ミサイルフリゲート 2 隻、高速戦闘支援艦 1 隻の計 6 隻からなっており、米海軍の空母打撃群の構成と同じである。このほかに、商級原潜が空母艦隊の航行海域を先行していたと考えられる。海上自衛隊の P-1 哨戒機が潜水艦を探知していた可能性はあるが、探知したことを公表すれば、能力を知られ

てしまうので控えているものと思われる。

また、4月28日午前、現在ソマリア沖・アデン湾で海賊対処活動中の第34次艦隊と交代する第35次艦隊が浙江省の舟山から出港した²⁰。同艦隊は29日、沖縄島・宮古島間を抜けて西太平洋に入り、バシー海峡を経て南シナ海などで訓練をしながらソマリア沖に向かった²¹。第33次艦隊と第35次艦隊はそれぞれ北海艦隊と東海艦隊に所属する艦艇であり、帰港・出港に利用した港の位置から見ると、台湾海峡を通過しようが沖縄島・宮古島間を抜けて太平洋からバシー海峡を通過しようが、目的地までの距離を考えればどちらの航路を選択しても大差

はない。そのようなときは敢えて台湾東部海域とバシー海峡を航行するルートを選択して、これらの海域に習熟させるようにしている可能性もある。

総じて言えば、中国軍の訓練は実戦を模したものにシフトしてきており、以前は考慮していた天候の要素を排除し、訓練時間を固定化せずに長時間にわたる連続した密集訓練を実施したり、夜間訓練を実施したりしている。第一列島線内での訓練を常態化させることによって、台湾民衆の警戒感を麻痺させる狙いがあると考えられる。

表1 中国軍艦艇の台湾周辺海域進出状況（2020年）

月日	艦名	航行海域
3月18日	ミサイル駆逐艦「西寧」、ミサイルフリゲート「濰坊」・「安陽」、高速戦闘支援艦「ココリシ湖」	台湾東部海域→沖縄島・宮古島間→青島 *ソマリア沖・アデン湾における第33次海賊対処活動を終えて青島に帰港途中
4月11日		沖縄・宮古島間→太平洋→南シナ海
4月22日	空母「遼寧」、ミサイル駆逐艦「西寧」・「貴陽」、ミサイルフリゲート「棗莊」・「日照」、総合補給艦「フルン湖」	南シナ海→バシー海峡→太平洋 *22～28日まで太平洋で訓練
4月28日		太平洋→沖縄・宮古島間→東シナ海
4月29日	ミサイル駆逐艦「太原」、ミサイルフリゲート「荊州」、補給艦「巢湖」	舟山→東シナ海→沖縄・宮古島間→太平洋→バシー海峡→南シナ海 *第35次海賊対処活動に向かう途中、5月2日に南シナ海で訓練

出所：歐錫富「遼寧艦趁美軍戦備下降對台武嚇」『國防安全雙週報』第1期（財団法人國防安全研究院、2020年4月24日）および筆者加筆により作成

表2 中国軍機の台湾周辺空域進出状況（2020年）

月日	機種、機数（複数の場合のみ記載）	飛行空域
1月21日	Su-30 戦闘機、Y-8 機	中国南部・バシー海峡を往復
1月23日	KJ-500 警戒管制機、H-6 爆撃機など	中国南部→バシー海峡→西太平洋を往復し中国に帰投
2月9日	J-11 戦闘機、KJ-500、H-6	バシー海峡→西太平洋→沖縄・宮古島間→中国

		* 統合幕僚監部は H-6 が 4 機沖縄・宮古島間を通過と発表
2月10日	H-6 など	バシー海峡→西太平洋を往復し中国に帰投
	J-11	上記 H-6 の護衛で台湾海峡中間線を一瞬越えて飛行
2月28日	H-6	台湾南西空域からバシー海峡を飛行後、中国に帰投
3月16日	KJ-500、J-11	台湾南西空域。海峡中間線を一瞬越えて飛行。 * 台湾周辺空域における初の夜間飛行訓練
4月10日	H-6、KJ-500、J-11	台湾南西空域からバシー海峡を飛行後、中国に帰投

出所：表 1 に同じ

2. 米軍の台湾周辺での活動も活発化

中国軍の台湾本島周辺における活発な訓練に対して米側も反応している。2018 年 4 月 24 日に米空軍所属の B-52H 戦略爆撃機 2 機が南シナ海を飛行した。B-52H はグアムのアンダーソン基地を離陸して南シナ海に飛行し、帰投前に沖縄付近で米空軍の F-15C 戦闘機と訓練を行った²²。これは、実施時期を考えれば、明らかに中国の一連の行動に対する牽制と受け取れる。米国が台湾問題に対して注意を払っていることを中国側に示したものと言ってよいだろう。

2019 年の米中関係は覇権対立の様相にシフトしてきたこともあり、台湾をめぐる米中の争いも深まっていった²³。米海軍艦艇の台湾海峡通過は毎月のように実施され、常態化した²⁴。同年における米海軍の台湾海峡通過ではミサイル駆逐艦 2 隻艦隊で航行した事例や、米海軍駆逐艦と沿岸警備艇による艦隊編制も見られたほか²⁵、ドック型輸送揚陸艦が P-8 哨戒機 2 機とともに台湾海峡を航行した事例も見られた²⁶。米国も海軍イージス艦単艦による航行だけでなく、さまざまな台湾海峡航行の形態を

試しているように見える。また、7 月における M1A2T 戦車 108 両の売却決定、8 月における F-16C/D BLK70 戦闘機 66 機の売却決定は、米国の対台湾武器輸出で近年稀にみる規模であり、台湾軍の戦力強化に直接結びつくものであった²⁷。

2020 年に入って、台湾周辺海空域における米軍の活動はさらに活発化している。米軍は電子偵察機や哨戒機を台湾周辺で飛行させて、各種情報収集していることがうかがえる。米軍は 2020 年 5 月 10 日の段階で、南シナ海・東シナ海・黄海・台湾海峡で 39 回飛行しているが、これは 2019 年の同時期と比較して 3 倍以上の飛行回数である²⁸。米軍機が頻繁に台湾周辺を偵察する理由は空母「セオドアローズベルト」のグアム検疫期間中と重なっており、この期間の中国軍の動向を把握する狙いがあったとも考えられる²⁹。

また、米空軍新鋭の B-1B 爆撃機 2 機が台湾北東空域を 5 月 4 日、6 日に飛行している。これは、5 月 14 日から渤海湾で開始された 2 か月半にわたる中国軍の大型演習に対する米軍の牽制と受け取れることもできよう。

表 3 米軍機の台湾周辺空域飛行状況 (2020 年)

月日	機種、機数 (複数の場合のみ記載)	飛行空域
1月31日	B-52H 爆撃機	台北飛行情報区内を巡航
2月2日	WC-135W 偵察機	南シナ海→台湾海峡南部
2月12日	MC-130J 特殊作戦機	台湾海峡を北から南へ

	B-52×2	台湾東部空域を北から南へ
2月13日	EP-3E 電子偵察機	嘉手納基地・台湾本島最南端南西 70～80 海里間を往復
2月18日	EP-3	南シナ海→台湾南部空域→嘉手納基地
3月11日	RC-135W 偵察機、P-3C 哨戒機	嘉手納基地→バシー海峡→南シナ海
3月18日	EP-3E	バシー海峡→台湾南西空域→南シナ海
	B-52H×2	グアム島アンダーソン基地→南シナ海 *途中で KC-135R が空中給油
3月19日	RC-135U 偵察機	嘉手納基地・南シナ海間往復
3月25日	EP-3E	台湾南西空域→高雄外海で数度周回
3月26日		台湾に近い東シナ海防空識別区を戦術偵察飛行 *途中で KC-135R が空中給油
3月27日	RC-135×2、EP-3E	台湾南西空域→南シナ海
3月31日	P-3C	バシー海峡→南シナ海
4月8日	RC-135U	台湾南部空域
4月10日	RC-135U	バシー海峡→中国沿海を偵察飛行
4月11日	EP-3E	バシー海峡→南シナ海 *「遼寧」が台湾東部海域を航行
4月12日	EP-3E	台湾南部空域
4月13日	RC-135U	台湾南西空域
	P-3C	バシー海峡→南シナ海
4月14日	P-3C	
4月15日	RC-135W	台湾南部空域
4月17日	RC-135U	
4月18日	P-3C	バシー海峡→南シナ海
4月21日	EP-3E	
4月25日	P-3C	
4月30日	EP-3E	バシー海峡→高雄外海で数度周回
5月1日	B-1B 爆撃機×2	米国本土→台湾北東方空域→アンダーソン基地
5月2日	EP-3E	バシー海峡→南シナ海
5月4日	B-1B×2	アンダーソン基地・台湾北東方空域往復
	KC-135R	嘉手納基地→バシー海峡→南シナ海
5月6日	B-1B×2	アンダーソン基地・台湾北東方空域往復

出所：表 1 に同じ

表 4 米軍艦艇の台湾周辺海域航行状況 (2020 年)

月日	艦名	航行海域
1月16日	タイコンデロガ級巡洋艦シャイロー	台湾海峡通過
2月15日	タイコンデロガ級巡洋艦チャンセラーズヴィル	
3月25日	アーレイバーク級駆逐艦マッキャンベル	
4月10日	アーレイバーク級駆逐艦バリー	
4月23日	バリー	
5月14日	マッキャンベル	

出所：表 1 に同じ

台湾の国防安全研究院先進科学技術・作戦概念研究所の欧錫富所長は、中国軍内における新型コロナウイルス感染症の罹患状況は秘匿されているが、一定規模の感染被害が出ており、各軍種も大型演習や集団訓練を停止しているとの見方を紹介している³⁰。ただ、本稿で分析したように中国軍による台湾への圧力が減少しているという印象はない。2020年2月には昨年3月以来の中国軍機による台湾海峡中間線越えの飛行があり、むしろ昨年よりも軍事

的圧力は強まっている。空軍では月あたり1～2回の台湾周辺での活動が報じられている。海軍に関しては年初こそ活動は報じられていないものの、3月、4月に台湾東部海域やバシー海峡で活動していることは注目される。

米軍も空軍機の活動については、台湾南部海域、バシー海峡を中心としており、同海空域における中国軍の動向の情報収集を重視しているものと考えられる。

プロフィール profile

地域研究部
部長 門間 理良

専門分野：中国・台湾の政治・軍事、中台関係、東アジアの国際関係、中国人民解放軍史

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
 NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
 ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011
 代 表：03-3268-3111 (内線 29171)
 F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

1 中華民国 106 年国防報告書編纂委員会編『中華民国 106 年国防報告書』（国防部、2017 年）38 頁。
 2 台湾国防部は日本の防衛省統合幕僚監部のように外国軍の特異な飛行事例や航行事例をいつもプレスリリースで報告する体制をとっていないため、正確なデータ把握は困難である。
 3 防衛省防衛研究所編『中国安全保障レポート 2016』（防衛省防衛研究所、2016 年）8～9 頁、20～21 頁。
 4 「国防部證實：共機連 3 天繞台 遼寧艦北返」『聯合新聞網』2018 年 4 月 21 日。すべてのケー

スで多機種による編隊飛行をしている訳ではなく、18 日と 20 日は H-6K 爆撃機 2 機だけで飛行している。
 5 台湾国防部プレスリリース（2018 年 4 月 18 日、19 日、20 日、26 日）を参照。
 6 「陸国防部證實 轟-6K、蘇-30 等戰機『繞島巡航』」『聯合新聞網』2018 年 4 月 19 日。懸架されていたのは模擬弾の可能性もある。
 7 「遼寧號走東不走西 學者：反美意味濃厚」『聯合新聞網』2018 年 4 月 21 日。
 8 統合幕僚監部報道発表資料「中国海軍艦艇の動向について」2018 年 4 月 20 日。

- 9 統合幕僚監部報道発表資料「中国海軍艦艇の動向について」2018年4月21日。
- 10 「遼寧號通過宮古海域往北 國防部全程掌握」『聯合新聞網』2018年4月21日。
- 11 「中國 2 架殲 11 越中線挑釁 我軍急攔截 對峙 10 分鐘」『自由時報（電子版）』2019年4月1日。
- 12 「囂張！中防長放話：中國將不惜一切統一台灣」『自由時報（電子版）』速報、2019年6月2日。
- 13 「中国、台湾周辺海域で軍事演習へ 米国への対抗措置か」『朝日新聞 DIGITAL』2019年7月29日。
- 14 総統府プレスリリース「108年8月1日總統針對中國軍演及自由行旅客來臺等時事議題發表談話」2019年8月1日。
- 15 「國防部：適切應處共機遠海長航」『軍事新聞通訊社（電子版）』2020年2月9日。「共軍多型戰機繞台飛行 我 F-16 戰機掛彈攔截畫面曝光」『風傳媒』2020年2月9日。
- 16 「四架『轟六』繞台 共軍還噏：有決心、能力挫敗台獨」『自由時報（電子版）』2020年2月9日。統合幕僚監部プレスリリース「中国機の東シナ海及び太平洋における飛行について」2020年2月9日。
- 17 「共機連兩日擾台！今更跨越海峽中線 國防部：F-16 戰機伴飛監控」『風傳媒』2020年2月10日。
- 18 統合幕僚監部報道発表資料「中国海軍艦艇の動向について」2020年3月19日。
- 19 「海軍第 33 批護航編隊凱旋」『解放軍報』2020年3月26日。中国海軍のソマリア沖・アデン湾での海賊対処活動は、通常 3 隻からなる艦隊で構成されている。第 33 次艦隊も旅洋 II 級駆逐艦、江凱 II 級フリゲート、フチ（福池）型補給艦各 1 隻からなる 3 隻体制だった（「中国海軍第 33 次護

衛艦隊がアデン湾へ出航」『人民網 日本語版』2019年8月30日）。

20 「中國海軍第 35 批護航編隊啟航赴亞丁灣」『人民網』2020年4月28日。

21 「海軍第 35 批護航編隊航渡途中開展針對性訓練」『國防部網』2020年5月4日。

22 “U.S. air force says trains in vicinity of South China Sea,” *Reuters*, April 27, 2018.

23 門間理良、岩本広志「第 2 章 中国」『東アジア戦略概観 2020』（防衛研究所、2020年）を参照。

24 門間理良「データから読み解く米台の緊密度」『外交』Vol.57 2019年9-10月号、28-29頁。

25 Commander, Naval Forces Japan Public Affairs “USS America, USS New Orleans to Forward Deploy to Japan, USS Stethem and USS Wasp to Return to U.S.” Commander, U.S. 7th Fleet, April 26, 2019. この他にも、フランス海軍のフリゲート「ヴァンデミエール」が4月6日に同海峡を通過したことをロイター通信が報じるなど、台湾海峡に関する各国の関心は高まっていることが窺える。

26 前掲「データから読み解く米台の緊密度」『外交』Vol.57 2019年9-10月号、28-29頁。

27 同上、29-30頁。

28 “US-China tensions in South China Sea fuelled by increase in military operations,” *South China Morning Post*, 10 May, 2020.

29 「台海軍情」美軍 EP-3E 電偵機 3 天内 2 度現蹤 專家：提前偵察共軍航路」『自由時報（電子版）』2020年5月2日。

30 歐錫富「遼寧艦趁美軍戰備下降對台武嚇」『國防安全雙週報』第 1 期（財團法人國防安全研究院、2020年4月24日）3頁。

（2020年5月23日脱稿）